

顔の性別判断による性差観予測の試み

— 若年女性における肌色のステレオタイプ効果とジェンダー意識 —

The Effect of Skin Color on Gender Judgment by Young Women

—How It Reveals Underlying Attitudes on Gender—

山田 雅子

YAMADA Masako

The face can be a source of critical information for making judgments about gender, and complexion can have an important influence. Earlier research (Yamada & Saito, 2007) shows that fair skin is generally taken to indicate a female, while darker skin suggests the person is male. As reported elsewhere (Yamada & Saito, 2006; Yamada, 2007a; Yamada, 2009), however, other factors such a person's attitude toward gender may color such judgment tendencies, leading to differing results. In this study based on these earlier experiments, we examine the possibility of determining a person's attitude toward gender through revealing characteristics of her responses to various faces. Results show that when it comes to judging a face that is slightly on the feminine side but with a dark complexion, a person's underlying gender attitudes almost inevitably come into play: a person who judges the dark-complexioned face to be male, for example, surely has traditional attitudes regarding gender.

1. はじめに

我々は顔から多くの情報を得ている。取り立てて意識されることもなく、顔が眼前に現れた瞬間に情報が取り出されている。多くの場合、そこに努力は殆ど必要ない。一面において、我々は顔からの情報分析に非常に長けているといえる。

性別情報も我々が顔から読み込んでいる内容の一つであり、顔写真を見ただけでも男性か女性かの判断は可能である。では、何に基づいてこの判断を下しているのだろうか。日本人の場合、眉と輪郭が利用されている可能性が高いとされ、これらが男女で入れ替わった場合には判断が逆転するという結果が得られている (Yamaguchi, Hirukawa, & Kanazawa, 1995)。コーカソイドの場合はまた異なり、鼻と顎が判別の要因となっていることが指摘されている (Bruce, Burton, Hanna, Healey, Mason, Coombes, Fright, & Linney, 1993)。このように、人種や文化によって手掛かりとする部分が異なることから、各人種における男女の顔の特徴の違いや文化的な作用が性別の判断に働いていると推測することができる。

だが、我々が得ている情報はこれだけではない。実際には肌の色を伴った状態で顔を見る場面が殆どであり、そうした色彩情報に対しても何らかの分析を施している筈である。特に日本においては「色の白いは七難隠す (肌の色が白ければ、少しくらいの欠点は隠れて美しく見える)」という捉え方がある上、その対象がほぼ女性に限られている現状がある。この点は辞書においても明らかであり (広辞苑第 5 版)、肌色をめぐる男女の非対称の構造の存在がここに指摘できる。こうした背景がある以上、肌の色という色彩情報は顔の性別の判断場面においても無視できない要素であるといえよう。当該問題に対するアプローチは既になされており、判断される性別に肌の色が影響を及ぼすことは明らかとなっている (山田・齋藤, 2004; 山田・齋藤, 2007)。顔の形態情報による作用の違いはあるが、色白肌は女性判断を促し、色黒肌は男性判断を誘う方向に働くという。すなわち、同じ顔であっても、色白であれば「女性」、色黒であれば「男性」として判断される可能性があることを実験結果は示しているのである。

しかし、肌の色のこうした作用は万人に見られた訳ではない。肌色の作用を強く受ける場合もあれば、形態にのみ依存する場合も見られたのである。この反応を分けるものはどのような要素なのであろうか。一つの可能性としてジェンダーに対する態度が据えられ、伊藤 (1997) による性差観と顔に対する性別判断との関係が検討された (山田・齋藤, 2006; 山田, 2007a; 山田, 2009)。この結果、伝統的性差観を持つ場合には肌色の作用が顕著に見られ、特に男性と色黒肌を結び付けて捉える傾向にあることが分かってきた。つまり、ジェンダーに対する態度と肌色に対する態度とは連動しており、しかも、顔に対する性別判断という新たな情報を処理する場面においても、肌色のステレオタイプを適用する傾向にあったのである。

では逆に、顔に対する反応からジェンダーに対する態度を予測することは不可能なのであろうか。本研究では、顔に対する性別判断を焦点に肌色の作用を改めて確認し、当該判断の特徴からジェンダーに対する態度の特徴を導出する。

2. 目的

顔の性別認知において、先行研究（山田・齋藤, 2007）に見られてきた肌色のステレオタイプ的作用とその特徴を再確認し、当該特徴とジェンダーに対する態度との連関を導き出すことを目的とした。また、現代の若年女性が持つ性差観について記述し、特徴を報告することも本研究のもう一つの目的とした。

3. 方法

3.1. 対象者

埼玉のビジネス系女子短期大学に通う女子学生 77 名（平均年齢 18.99 歳、標準偏差 0.57）と東京の医療福祉系専門学校に通う女子学生 107 名（平均年齢 19.54 歳、標準偏差 1.22）、計 184 名（平均年齢 19.31 歳、標準偏差 1.03）

3.2. 実施期間

2006 年 1 月～2009 年 1 月

3.3. 手続き

3.3.1. 性別カテゴリ判断（二件法）と丸み評定（六件法）¹

印刷された顔刺激 13 種²（詳細は 3.4.参照）を対象者に提示し、男性と女性の何れに見えるかを判断させた。また、当該顔刺激について丸みがどの程度感じられるかを「非常に角張った」「かなり角張った」「やや角張った」「やや丸みのある」「かなり丸みのある」「非常に丸みのある」の 6 段階より選択させた。

¹ 本稿では分析対象としないため記述しないが、性別カテゴリ判断課題の後に女性度評定課題（Sheffe の一対比較法）と肌色観に関する調査も併せて行った。

² 顔刺激 13 種のうち 3 種は顔パタンのバリエーションを推測されないためのフィラー刺激であるため、第 4 項における分析対象から外した。

3.3.2. 性差観スケール（四件法）

ジェンダーに対する意識を測定する尺度として、性差観スケール 30 項目を用いた (伊藤, 1997)。各意見 (詳細は Table 1 参照) に対してどの程度同意するかを、「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらかというと思う」「そう思う」の 4 段階から選択させた。

3.4. 提示刺激（性別カテゴリ判断と丸み評定）

男性モデル 16 名 (平均年齢 23.00 歳)、女性モデル 16 名 (平均年齢 22.13 歳) の顔に基づく合成顔を各性別の平均顔とし、両者を段階的に合成した顔を提示刺激として用いた。各顔のサイズは概ね約 32×23mm とした (男女の平均顔に基づく刺激であるため、縦横の比率は刺激によって若干異なる)。

まず、各性別の平均顔の作成にあたり、各モデル (計 32 名) には無髭無化粧を指示し、額に前髪がかかからない状態で撮影を行った。デジタルカメラで撮影したこれらの画像から二者ずつを選択して平均化し、処理後の画像を更に平均化することで各性別の平均顔を作成した。尚、当該過程では Morpher2.0 をモーフィングツールとして用いた。

本実験では男性から女性までのバリエーションを持たせる必要があるため、男女の 2 種の平均顔を更に平均化の際に合成比率を調整し、段階的な差を持つ 5 種の顔を作成した (女性顔パターン合成率 25%、40%、50%、60%、75%)。肌色の加工の段階においては Adobe 社製 Photoshop7.0 を用い、各顔刺激の肌色の明るさを 2 段階に調整した。このときの肌色の明度は、明るい肌色が $L=90$ 、暗い肌色が $L=70$ である (本稿では、前者を色白、後者を色黒として表記する)。使用した顔刺激のパターンを Figure 1 に示す。但し、当該図は実際の大きさとは異なる。











	顔パターン	MALE (25%)	male (40%)	neutral (50%)	female (60%)	FEMALE (75%)
肌色	色白肌					
	色黒肌					

Figure 1 顔刺激

実験の際には前述の手順で作成した顔刺激をランダムに配置し、紙面にカラー印刷して提示した。尚、本稿では顔パタンの特徴を示す表現として、MALE（女性合成比率 25%）、male（同比率 40%）、neutral（同比率 50%）、female（同比率 60%）、FEMALE（同比率 75%）を用いることとする。

4. 結果及び考察

4.1. 性差観スケール

性差観スケール 30 項目のそれぞれに対し、回答された段階に応じて 1（そう思わない）から 4（そう思う）の数値を当て、平均値及び標準偏差、合計平均を算出した。各項目に対する回答の集計結果を Table 1 に示す。尚、平均の左に付した記号（○/×）は、全体として同意される傾向にあったか否かを示すものであり、境界にあたる 2.5 以上の項目には「○」、2.5 未満の項目には「×」を記した。

平均値の低い項目、つまり、同意されなかった意見内容に注目すると、「7. 女性は視野が狭い (1.582)」「8. 中学になると、男の子の成績の方が伸びる (1.728)」「5. 女性は出産する可能性があるため、男子と仕事の上で互角に並ぶのは無理である (1.908)」「4. 女性は、体力や精神力の点でパイロットなど人命をあずかる仕事には向いていない (1.984)」を挙げることができる（括弧内は各項目の平均値）。これらは、項目全体の中でも女性に対してやや批判的な内容であり、根拠に乏しいか、根拠が示されている場合でも因果関係が不明確で、対象者達の内実に実感が得られていない内容であると推測される。

一方、平均点が高く、同意された意見内容としては、「28. 男性と女性は、本質的に違う (3.212)」「29. 男性の性欲は、概して女性にくらべて強い (3.212)」「26. 女性は月経があるので、精神的に不安定である (3.071)」「18. 子どものことより自分のことを優先して考えるような女性は、母親になるべきでない (3.038)」「9. 女性は男性に比べて感情的である (3.011)」「25. たくましい精悍な体つきは、男性の魅力として重要である (3.000)」などが見られた。こうした項目の特徴は、女性に対する評価的な内容を含んでいないことであるが、ややネガティブとも捉えられる意見（「精神的に不安定」「感情的」）についても、対象者達の間では共通認識となっていることが捉えられる。

また、標準偏差が高かった項目として、「20. 女が人前でタバコを吸うのは好ましくない

(1.030)」があるが、これについては喫煙者とそうでない対象者、喫煙者が身近にいる場合とそうでない場合との間で意見が分かれたことが推察される。

Table 1 性差観スケール 平均値及び標準偏差

評 定 項 目		平均	標準偏差
1. 最終的に頼りになるのは、やはり男性である。	○	2.527	0.899
2. 体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのは、やむをえない。	×	2.239	0.945
3. 家庭のこまごまとした管理は、女性でなくては、と思う。	×	2.299	0.889
4. 女性は、体力や精神力の点でパイロットなど人命をあずかる仕事には向いていない。	×	1.984	0.890
5. 女性は出産する可能性があるため、男性と仕事の上で互角に並ぶのは無理である。	×	1.908	0.759
6. 人前では、妻は夫を立てた方がよい。	○	2.696	0.890
7. 女性は視野がせまい。	×	1.582	0.832
8. 中学になると、男の子の成績の方が伸びる。	×	1.728	0.870
9. 女性は男性に比べ、感情的である。	○	3.011	0.975
10. 子育ては、やはり母親でなくては、と思う。	○	2.625	0.927
11. 論理的思考は、男性の方がすぐれている。	×	2.277	0.846
12. セックスにおいて男性がリードするのは当然である。	○	2.859	0.755
13. 冒険やロマンは、男性の究極のよりどころである。	○	2.685	0.816
14. 女性は何かにつけて責任を回避しがちである。	×	2.082	0.822
15. 女性のすぐれた思想家は、あまり出ない。	×	2.092	0.780
16. 一家の家計を支えられないような経済力のない男性は、男として失格である。	○	2.913	0.851
17. 男性は女性にくらべ、人を使うのが上手である。	×	2.038	0.757
18. 子どものことより自分のことを優先して考えるような女性は、母親になるべきでない。	○	3.038	0.832
19. 男はむやみに弱音を吐くものではない。	○	2.500	0.905
20. 女が人前でタバコを吸うのは好ましくない。	○	2.793	1.030
21. 女性は男性にくらべ、臆病だ。	×	2.092	0.898
22. 男性は女性にくらべ、攻撃的である。	×	2.489	0.849
23. 女性が入れたお茶はやはりおいしい。	×	2.418	0.832
24. 子どもを他人に預けてまで、母親が働くことはない。	×	2.092	0.847
25. たくましい精悍な体つきは、男の魅力として重要である。	○	3.000	0.761
26. 女性は月経があるので、精神的に不安定である。	○	3.071	0.776
27. 女性は男性にくらべ、手先が器用である。	○	2.674	0.857
28. 男性と女性は、本質的に違う。	○	3.212	0.785
29. 男性の性欲は、概して女性にくらべて強い。	○	3.212	0.764
30. 男は背が高くなければ、と思う。	○	2.837	0.938
		30 項目合計	74.973 9.874

Figure 2 は性差観スケールの合計得点の分布を示したヒストグラムである。最低得点は 52、最高得点は 100 であり、得点分布の範囲は広いが極端な偏りはなく、平均値 (74.973) や中央値 (75) を含む 71 から 75 ポイントの階層を中心として緩やかに分布が広がっていることを確認できる。既往研究 (東京女性財団, 1996) においては合計の平均値が 73.8 であったとされるが、本結果は当該値よりも 1 ポイント程度高く、当該集団に比して若干伝統的性差観に寄っていたと言い得る。東京女性財団 (1996) の報告から 10 年以上の年月が経過していることになるが、男女平等の意識が浸透した現在のデータにおいてむしろ伝統的意識が強化されている状況にあったことは特筆すべきであろう。本結果は、女子短大生 (全対象者中の 4 割) と所属生の多くを女性が占める専門学校生 (同 6 割) が対象者であったことに起因している可能性もある。同性との接触に偏った人間関係では、内集団びいき (ここでは女性集団びいき) が進み易いことも考えられる。

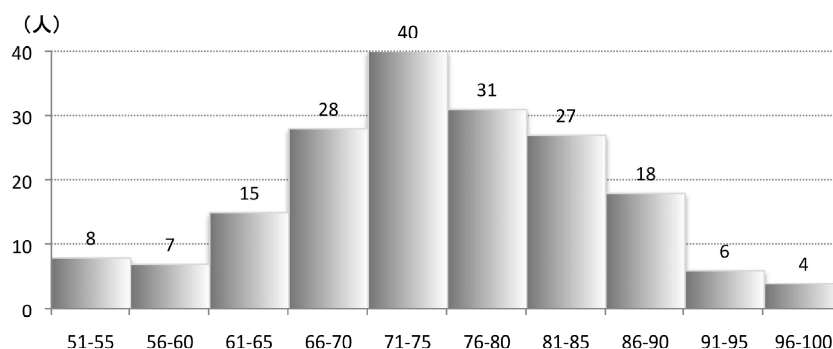


Figure 2 性差観スケール合計得点のヒストグラム

4.2. 性別カテゴリ判断と丸みの評定

各顔刺激に対する性別カテゴリ判断を集計し、6 段階の丸み評定に対しては 1 (非常に角張った) から 6 (非常に丸みのある) の数値を段階に応じてあて、基本統計量を算出した。Figure 3 は、各刺激の女性判断率 (棒グラフ) と丸み評定 (折れ線グラフ) を示したものである。

4.2.1. 性別カテゴリ判断

Figure 3 においては、各顔パターンに対する女性判断率 (棒グラフ) が肌色の違いによって大きく異なっていることが確認できる。顔パターン毎にカイ自乗検定 (肌色 2×判断された性別 2) を行った結果、MALE (25%)、male (40%)、neutral (50%)、female (60%) の 4 つの顔パタ

ンにおいて判断の違いが有意であった (MALE: $\chi^2=15.637, p<.001$ / male: $\chi^2=28.698, p<.001$ / neutral: $\chi^2=71.334, p<.001$ / female: $\chi^2=22.423, p<.001$)。よって、同じ顔パターンであっても肌色が加わることで判断される性別は変化する可能性があり、肌色が色白であれば女性判断、色黒であれば男性判断に引き寄せられる傾向にあるということが出来る。特に男女の顔の物理的情報を 50% ずつ含む neutral は肌色による判断の違いが顕著であり、色白肌の場合には約 7 割の対象者が女性と判断する一方、色黒肌では 7 割を超える対象者が逆に男性と判断したことになる。つまり、同一の形態が肌色の違いのみによって完全に違った性別として捉えられたことになる。

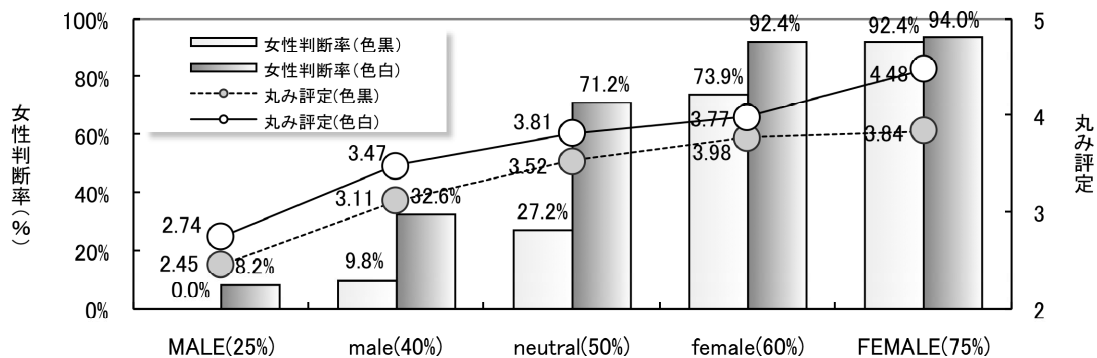


Figure 3 各刺激に対する女性判断率と丸み評定

更に、マクネマー検定により肌色の変化による性別判断の変化を分析した。その結果、カイ自乗検定の結果と同様に、MALE (25%)、male (40%)、neutral (50%)、female (60%) の 4 種において判断の変化が有意であると認められた (MALE: $\chi^2=13.067, p<.001$ / male: $\chi^2=25.470, p<.001$ / neutral: $\chi^2=57.658, p<.001$ / female: $\chi^2=23.674, p<.001$)。よって、最も女性寄りの形態である FEMALE (75%) を除いて、肌色のステレオタイプの効果が見られたといえる。

これらの結果は既往研究 (山田・齋藤, 2007) と共通する部分が多いが、本実験ではより強く、より広範囲に亘って肌色による作用が認められたといえる。先行する実験では 50% と 60% の刺激においてのみ見られた肌色の作用が、本実験では 4 種の顔パターンについて有意であり、肌色が判断に影響を及ぼすための形態的条件が緩和されているといえる。本実験における回答のパターンは多数あり、MALE (25%) のような形態に至って初めて男性判断することもできれば、MALE (25%) を含め、全て「女性」と答えることもできる。また、何れの顔パターンにおいても肌色に

反応するとすれば、色白肌刺激は必ず「女性」、色黒肌刺激は必ず「男性」といった回答になる。本実験の結果は、こうした回答のバリエーションが生じる可能性がある上で得られたものであるといえるが、対象者の数を4倍以上に拡大した上で当該傾向が得られたことは非常に有意義であり、肌色が持つ影響の強さと形態条件との相互作用について新たな可能性が示唆されたといえる。

4.2.2. 丸み評定

Figure 3における右上がりの折れ線グラフに表されるように、丸みに対する評定結果は顔パターンが女性寄りになる程高くなっており、丸みを強く評定されたことを指摘できる。また、肌色毎にその傾向は若干異なり、色白肌の方が形態の変化の影響を受け易かったことが窺われる結果となっている。顔パタンの女性率を x 、評定された丸みの平均値を y として回帰分析を行ったところ、各肌色について次の式が導出された。

$$\text{色白肌} : y=0.033x+2.028 (r^2=0.973)$$

$$\text{色黒肌} : y=0.028x+1.918 (r^2=0.898)$$

切片や傾きの値からは、色白肌の方が丸みを帯びているとして評価され、且つ、形態（顔パターン）の変化によって更にその丸みが強化される傾向にあることが分かる。一方の色黒肌は形態に伴う変化が緩やかであり、色白肌と比べて形態的な影響を受けにくいことが指摘できる。

更に、色白肌と色黒肌の差に対して t 検定を行った結果、全パターン共有意であることが認められた (MALE: $t=2.929$, $p<.01$ / male: $t=4.003$, $p<.001$ / neutral: $t=3.386$, $p<.001$ / female: $t=2.561$, $p<.05$ / FEMALE: $t=4.417$, $p<.001$)。何れのパターンにおいても、色白肌の方がより丸みを帯びて評価され、一方の色黒肌の方は角張った印象を持つとして評定されたことになる。特に肌色の差が明確に見られたのは最も女性寄りの FEMALE (75%) であるが、元々丸みのある形態に色白肌が加わることにより、高明度色 (明るい色) の持つ膨張効果が高まることがこの結果から推測される。一方、収縮色とされる低明度色 (暗い色) の効果については形態との組み合わせによる相乗的な作用は顕著ではなく、最も男性寄りのパターンである MALE (25%) において極端に角張った印象が強まる傾向は見られなかった。先行研究 (山田・齋藤, 2007) においても同様の結果が見られているため、当該傾向は肌色と顔の形態の組み合わせが持つ特徴とも捉えられるが、平均顔というパタンの特殊性について考慮し、より男性寄りの形態を用いたときに色黒肌との相乗効果が得られる可能性についても考えてみる必要がある。

4.3. 性別カテゴリ判断による性差観スケールの分析

4.3.1. 中庸パターンにおける性別判断傾向と性差観の連関

male、neutral、female の 3 種の顔パターンは男性と女性の物理的成分が拮抗する顔形態である。

4.2.において示した結果においても、これらの顔パターンを持つ 6 種の顔刺激に対しては、MALE (25%) や FEMALE (75%) に比して判断される性別が固定化されておらず、個人差が生じ易いことが確認できる。これを踏まえ、これらの 3 種の顔パターンに対する性別判断をまとめ、当該結果を要因として性差観スケールの合計得点に対する分散分析を行った。色白肌、色黒肌に対する判断としては、[男性/男性] [女性/女性] 「女性/男性」 [男性/女性] の 4 種の反応が存在し、本分析を行うことによって性別判断の反応特徴 (4 種) による性差観の特徴の有無を探ることができる。

Table2 は各顔パターンの反応特徴の度数と、各群の性差観得点の平均値、及び分散分析結果を示したものである (例：女性寄りの female の場合、色白を「女性」、色黒を「男性」と答えた対象者は 40 人で、当該群の性差観平均値は 80.400 である)。

Table 2 中庸刺激に対する性別判断の組み合わせによる性差観の分析結果 (分散分析)

顔パターン	男/男判断	女/女判断	女/男判断	男/女判断	F 値
	(性差観平均)	(性差観平均)	(性差観平均)	(性差観平均)	
male (40%)	112 (74.384)	6 (74.833)	54 (76.537)	12 (73.500)	0.6703
neutral (50%)	38 (73.868)	35 (74.200)	96 (75.177)	15 (78.267)	0.7974
female (60%)	8 (76.750)	130 (73.515)	40 (80.400)	6 (68.000)	6.6136 ***

※***p<.001

分析の結果、女性寄りの female パターン (60%) において、反応特徴による性差観の差が有意であると認められた (0.1%水準)。多重比較検定 (Sheffe) によると、色白肌の刺激を「女性」、色黒肌の刺激を「男性」と回答した対象者は、色白肌、色黒肌共「女性」と答えた群 (1%水準) と色白肌を「男性」、色黒肌を「女性」と答えた群 (5%水準) に比べて性差観得点が高く、ジェンダーを伝統的に捉えていることが分かった。色白肌刺激を「女性」、色黒肌刺激を「男性」と答える反応はステレオタイプの言い得るが、当該反応を示す対象者はその他の群 (色白・色黒共「女性」と答えた群は除く) よりも伝統的なジェンダー意識を持っていたことになる。群

の大きさに違いがあるため、本結果から即座に結論を出すことは避けなければならないが、顔に対する性別判断の特徴から、性差観を予測できる可能性が一つ示されたと言えよう。

4.3.2. 中庸パターンにおける性別判断の特徴と性差観の連関

前項の分析に加え、中庸パターン (male、neutral、female) の各顔刺激に対する個々の反応によって対象者を更に群分けし、性差観との連関を探究した (Table3 参照)。性差観スケールの合計得点について一要因 (特定の顔刺激に対する性別判断) の分散分析を行った結果、女性寄りの female (60%) の色黒刺激においてのみ性別判断による性差観の差が見られ、当該刺激を「女性」と判断した群よりも、「男性」と判断した群の方がより伝統的な性差観を持つことが分かった。

Table 3 中庸刺激 6 種の性別判断による性差観の分析結果 (分散分析)

顔パターン	肌色	男性判断数	女性判断数	F 値
		(性差観平均)	(性差観平均)	
male (40%)	色白	124 (74.298)	60 (76.367)	1.7818
	色黒	166 (75.084)	18 (73.944)	0.2155
neutral (50%)	色白	53 (75.113)	131 (74.916)	0.0150
	色黒	134 (74.806)	50 (75.420)	0.1402
female (60%)	色白	14 (73.000)	170 (75.135)	0.6036
	色黒	48 (79.792)	136 (73.272)	16.8041 ***

※***p<.001

女性平均顔の特徴を 60% 持つ female パターンは若干女性寄りの物理情報を持つといえるが、当該顔パターンが色彩情報を持たない場合、つまり、白黒刺激として形態情報のみ与えられた場合には 9 割以上が「女性」と判断するという結果が得られている (山田・齋藤, 2007)。つまり、形態情報のみでも「女性」として認識されるに足る情報を持っていることになる。換言すれば、他の顔パターン以上に安定した性別情報を持つ顔であるといえ、肌色によって性別が変化しにくい条件として捉えることもできる。当該特徴を持つ female パターンに色黒肌が加わった顔を「男性」と

判断したということは、他の顔パタン以上に肌色の影響を強く受けた結果であるとして解釈することもできる。同様の条件として、やや男性の形態を持つ色白の顔に対して「女性」と判断する回答パタンがあるが、有意ではないものの、他の条件に比して男性判断群と女性判断群との性差観の差が大きかったことが指摘できる。やはり、ここでも肌色のジェンダースtereotypeに従った反応（女性判断）をした群の方が伝統的性差観を示しており、より難しい条件で肌色を参照するか否かを調べるのが性差観の推測に有用であることが示唆されたといえる。

本実験で比較した群は不均等であるため、そのことが結果に影響した可能性は残されるが、特定の顔に対する反応からジェンダー全般に関わる態度を予測できる可能性が本結果から得られたといえる。重要な点は、形態が持つ性別の情報にやや曖昧性がある顔の条件を設定し、その顔にとって異性にあたるジェンダースtereotypeの肌色（男性なら色白、女性なら色黒）を施した場合の反応を検討することであることが、本結果から窺われたといえる。

5. 総合考察

既往研究（山田・齋藤, 2007）に見られた通り、顔の性別判断における肌色のステレオタイプ的な作用は本研究においても安定的に確認され、色白肌は女性判断を、色黒肌は男性判断を促す傾向にあることが分かった。本実験では、先行研究以上に明瞭な肌色の作用が認められたとも言い得るが、肌の色が作用を及ぼした背景には、第一に実際の男女の肌色の違いがあると考えられる。女性は男性よりも高明度（明るい）、低彩度（色が薄い）の肌色であるとの傾向が得られており、これはまさに色白の特徴であるといえる（山田, 2007b; 吉川, 2005; 道江・中村・山崎・飯塚, 2000）。更に、過去10年の間に女性の肌は黄白くなってきたとの指摘もある（棟方・吉川, 2005）。この変化を支えるものは、日焼け止めの使用などと推測されているが、他方の男性にも同等に日焼け止めが使われているかといえ、そうとは断言できない。美白化粧品の殆どが女性向けられたものであると同様に、日焼け止めもまた、女性の間でのみ普段から使用される化粧品であり、結果的には女性のみ紫外線による日焼けを避けた状態となる。そこで際立つのは、男性よりも一層色白化する女性の姿の方であろう。男女に対する肌色の概念を尋ねた結果としても、男性と色黒肌の繋がりが不明瞭である一方、女性と色白肌の結び付きは非常に強いものがあり、性差観に依らず安定して認められている（山田, 2007a; 山田, 2009）。意識的でないにせよ、第1項で示した「色の白いは七難隠す」という美意識は、依然若い女性達の間でも共有されており、自ら

が目指す規範としても機能しているのである。こうした状況の下では、肌の色が持つ性別ラベルとしての意味が強化され、当該枠組みを利用した顔の性別判断が起り易くなるものと思われる。

また、性差観との連関については、**female (60%)** のような若干女性寄りの顔が色黒肌を伴う場合の反応が性差観の推測に結び付く可能性のあることが明らかとなった。すなわち、当該顔刺激を「男性」と判断すれば伝統的性差観が強い可能性が高いというわけである。既往研究（山田・齋藤, 2006; 山田, 2007; 山田, 2009）では、性差観→顔の性別判断という方向で検討が行われ、伝統的性差観を持つ対象者の方が肌色を参照した判断になり易いという結果が見られているが、本研究では、顔の性別判断→性差観という方向でアプローチし、一つの可能性を得たことになる。だが、顔に対する判断と Table 1 の項目に示されるようなジェンダーに対する態度は直接的に結びつきを持つわけではない。ここでは、何故連関を持つのか、顔に対する反応から性差観を予測することに妥当性はあるのかという点を考えてみたい。

Yamaguchi (2000) によれば、乳児でも 8 ヶ月の頃になると男女の顔のカテゴリが完成し、新たに見せられる顔が男性のものであっても、女性のものであっても、その顔に対するカテゴリ分類は可能となっているという。しかし、6 ヶ月の時点では女性のカテゴリのみ完全で、男性のカテゴリの方は不完全であることが示唆されている。この結果が示すように、我々は類似する顔の特徴からカテゴリを作り出しているといえるが、重要なことは、形成される顔カテゴリが視覚的情報として日々摂取される顔に依存する可能性があるということである。これを踏まえれば、顔形態に対する反応は対象者全員で一律のものでないことは当然であり、特定の顔に対する反応からその時まで蓄積されてきた顔の情報を捉えることもできると考えられる。

また、性差観と肌色観との間にも関わりがあることが分かっており、伝統的性差観を持つ場合には色白肌と女性との繋がりのみならず、色黒寄りの肌と男性との関係も明確に見出されている（山田, 2007a; 山田, 2009）。つまり、男女の肌色の違いがより大きく認識されていることになる。このことは実際の肌色の認識にも影響を与える可能性があり、男女間で然程の差はない肌色であっても、実際以上に差があると感じたり、違いのある男女の対象を選択的に抽出したりすることも考えられる。男女の差をより多く経験することによって肌色の手掛かりとしての位置付けがより強化される可能性も高い。我々はただ受け身で情報を得ているのではなく、能動的に情報を摂取し、「そのように見ている」面があることも否定できない。

更に、肌色のイメージそのものが男女それぞれのイメージとリンクしている可能性もある。女子大生が持つ肌色のイメージは色白と色黒で全く逆であり、前者に持たれるイメージは後者には持たれず、後者に対して持たれるイメージは前者にないとの結果が得られている（ポーラ文化研

究所, 2000)。「清潔」「上品」「女性的」「美しい」「かわいい」「やさしい」「好ましい」「知的」「内向的」「若い」は色白肌の持つイメージであり、「活動的」「野生的」「健康的」「派手な」「積極的」「若い」「明るい」「個性的」は色黒肌が持つイメージとされる。本研究ではこうしたイメージの抽出は図っていないが、伝統的性差観の場合には肌色間の印象の違いがより顕著で、性別のイメージと結びついたものとなっていることも推測される。

本研究では、肌色を施した顔に対する反応から性差観を予測できるという一可能性を示したに過ぎないが、ここで示した方法が信頼できる結果を生むとすれば、ジェンダーに対して伝統的な考えを持つか否かを意識レベルでの活性化なしに調べることができる。今後なすべき課題は多いが、ジェンダーに対する態度と何らかの反応の繋がりを探っていくことにより、概念化やステレオタイプ生成の過程にも迫っていくことができるものとする。

6. 今後の課題

本研究では顔に対する性別判断の特徴からジェンダーに対する態度を予測できる可能性が示唆されたが、これについては比較データの群のサイズの不均等から生じた結果であることも考えられる。対象群を拡大して再実験することが第一の課題であり、対象とする群を変えて妥当性を確認することも必要と考える。また、本研究は女性のみを対象としたものであるため、男性についても改めて傾向を把握することが求められる。

更に、ジェンダーに対する態度を測定する手段として、性差観スケールとは異なる尺度を用いることも新たな展開をもたらすものと予想する。

7. 結論

- ・ 顔の性別判断に肌色が作用を及ぼすことが再確認され、色白肌は女性判断を、色黒肌は男性判断を促すことが分かった。更に、顔形態との相互作用があり、性別の特徴が曖昧な形態を中心として作用が最大化する傾向が見られた。
- ・ 顔の性別判断の特性からジェンダーに対する態度を予測できる可能性が皆無ではないことが分かった。色黒で若干女性寄りの物理情報を持つ顔に対し、「男性」と判断する場合には、

伝統的な性差観を持つ可能性のあることが示唆された。

- ・ 全体として見た場合、10年以上前の研究結果（東京女性財団, 1996）に比べ、現代の女子短大生や専門学校的女子学生はジェンダーに対してやや伝統的な見方を持つ傾向にあることが捉えられた。

参考文献

- Bruce, V., Burton, A. M., Hanna, E., Healey, P., Mason, O., Coombes, A., Fright, R., & Linney, R.(1993). Sex discrimination: how do we tell the difference between male and female faces?. *Perception*, 22, 131-152.
- 伊藤裕子 (1997). 高校生における性差観の形成環境と性役割選択—性差観スケール(SGC)作成の試み. *教育心理学研究*, 34, 168-174.
- 道江砂江子・中村美和・山崎和男・飯塚幸子 (2000). 日本人男女における加齢に伴う皮膚色の変化. *実践女子大学 生活科学部紀要*, 37, 101-105.
- 棟方明博・吉川拓伸 (2005). 色の白いは七難隠す?. *日本色彩学会誌*, 29, 1, 42-45.
- ポーラ文化研究所 (2000). 女子大生にみる肌色観 白肌と顔黒のはざままで. *化粧文化*, 40, 80-82.
- 新村出 編 (1998). *広辞苑*第5版, 岩波書店
- 東京女性財団 (1996). 性差意識の形成環境に関する研究—性差に関連する文化の形成および教育効果に関わって, 55-66.
- 山田雅子 (2007a). 顔の性別認知における肌色の作用とジェンダースキーマ (2) . *日本社会心理学会大48回大会発表論文集*, 808-809.
- 山田雅子 (2007b). 膚色における性差—自己の肌の概念色と実際の色—. *埼玉女子短期大学研究紀要*, 19, 249-261.
- 山田雅子 (2009). 顔の性別認知における肌色の作用とジェンダースキーマ (3) . *日本社会心理学会大50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集*, 452-453.
- 山田雅子・齋藤美穂 (2004). 顔の性別認知における肌色効果—性別準拠枠としての肌色カテゴリー—. *日本色彩学会誌*, 28, 2, 73-85.
- 山田雅子・齋藤美穂 (2006). 顔の性別認知における肌色の作用とジェンダースキーマ (1) . *日本社会心理学会大47回大会発表論文集*, 320-321.
- 山田雅子・齋藤美穂 (2007). 顔の性別認知における形態と肌色の作用—顔形態による肌色作用の変化—. *日本色彩学会誌*, 31, 3, 183-194.

Yamaguchi, M. (2000). Discriminating the gender of faces by 6 month and 8 month old infants. *Perceptual and Motor Skills*, 91, 653-663.

Yamaguchi, M., Hirukawa, T., & Kanazawa, S. (1995). Judgment of gender through facial parts. *Perception*, 24, 563-575.

吉川拓伸 (2005). 肌色を科学する—第 2 回—. 日本色彩学会誌, 29, 2, 125-129.